

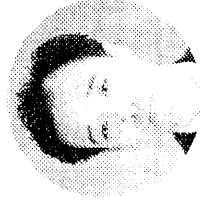
景観を読む

二一世紀となった今、人口ピラミッドの変化、地方分権、国際化といったように社会が大きく変化しつつある。さまざまな公共サービスを提供する公共建築も変わってゆくのではない。そんなことを考えさせるのが、福岡市南区に完成した「ゆめアール大橋」である。

この白い瀟洒な建物は大橋駅東口にあるバスロータリーに面する敷地にある。この敷地は不整形で、裏道や大通りにも面しているという利点はあるが、角を商業建築が占めており、いびつな不整形である。

そこで建物は、外側の輪郭を矩形や円形などとはっきりさせるのではなく、中央に歩道をとり、その左右に「こどもプラザ」そして「福岡市大橋音楽・演劇練習場」といった公共施設を配置するかたちとなった。さらにこの夏には大学のサテライト型教育・研究施設も建設される。この歩道は、大通りや裏道にも繋がっているため、そこへの近道にもなり、人びとがそぞろ歩きできる新しい都市空間をも創設している。

設計者である建築家・石田壽一さん(九州大学大学院教授)の説明によれば、この建物はいわゆるプレハブである。より正確に言えばオー

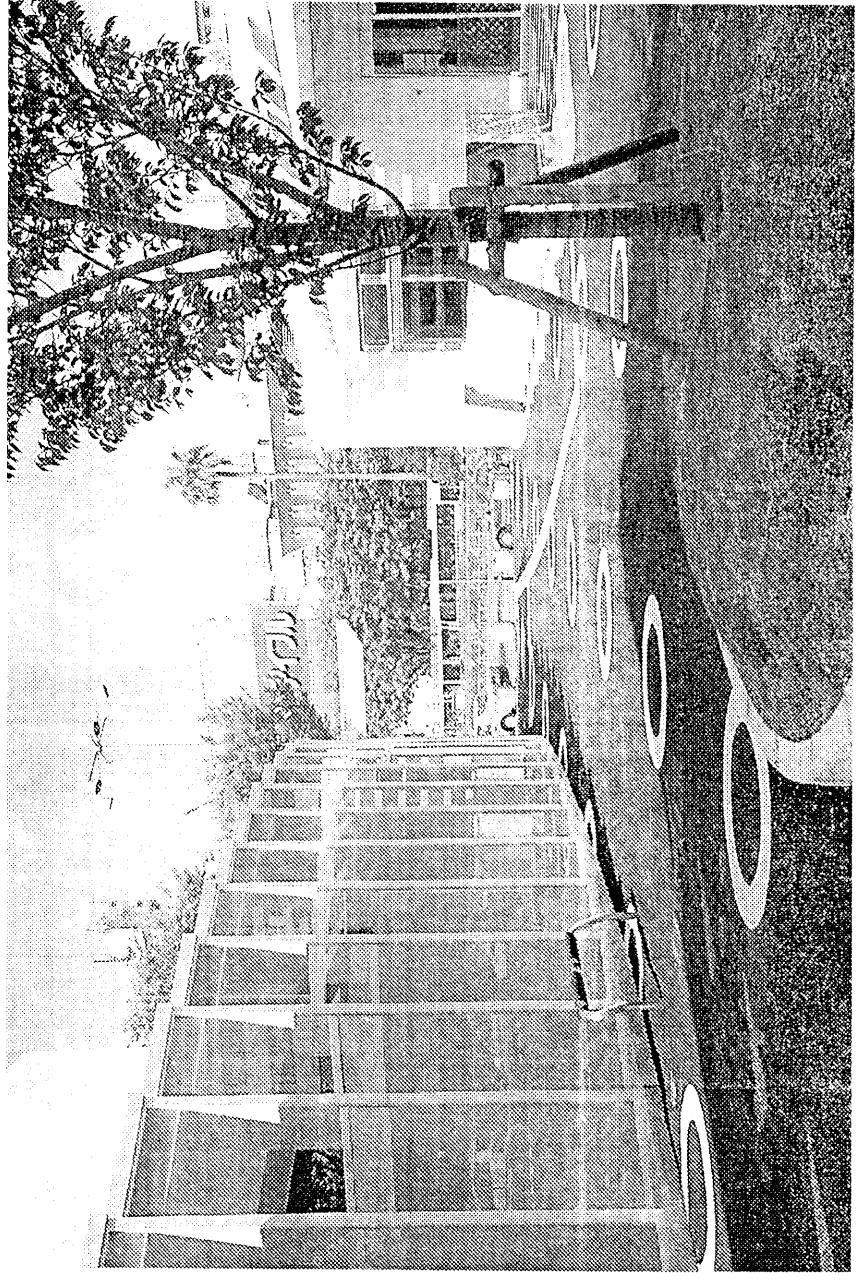


土居 義岳

(九大大学院教授)
西洋建築史

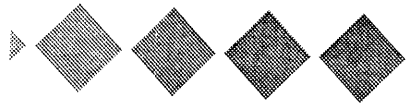
ソブックスな建築仕様の建物はきかない。ではなく、プレハブ仕様の建築ではなく備
 つまり建築仕様の公共施設きるので、か
 になると構造や材料や設備なデザインがで
 どについてすでに仕様が決ま然、工費も工
 っているから自由なデザイン、く小さくても

プレハブの公共建築



歩道を中心にプレハブとは思えない瀟洒な建物が並ぶ「ゆめアール大橋」(筆者撮影)

「ユークロ」を着る



お客様の建物
はできません。しかしア
ンブル様になると、予算的には建
築ではなく備品として発注で
きるのです。かえって自由な字
体や設備な
デザインが
できるばかりか、当
然、工費も工期もいちじるし
く小さくできる。

のではなく、むしろ肩の力を
抜いて、さびげなく併存して
いる。白と灰色も、さまざま
な色からなるこの駅前広場
空間のなかで、地としてけ
込んでいます。
これはかなたは、むしろ積
極的なはかなさである。これ
からの公共サービスには二
点が求められる。まず社会の二

地域主義も含まれる。そこ
では記号としての建築が求め
られる。いわく地域にふさ
わしいデザインである。

しかし「ゆめアール大橋」
では身体にいかについっとせ
ざるかが追求されている、と
私は観察している。使用者に
とって過不足ないという感覚
である。これは設計者の世代
の建築家には共通する志向で
ある。比喩的にいえば、バ
ブルの頃のようにブランドで
着飾るのではなく、無印やユ
ニクロといった特性のない
ものを、しかし工夫してセ
ンスよく着こなす感覚であ
る。

を着こなすように



い瀟洒な建物が並ぶ

また前述のサ
ライト施設に
関しては、石田
さんはアルミで
建てる計画だと
いう。アルミは
スチールより単
価は高いが、建
物の自重を三分
の一にまで軽く
できるので、基
礎工事、工作機
械、工期などに
かんしてかなり
有利であるら
しい。さらにアル
ミはリサイクル
率100パーセン
トなので環境
に優しい建築と
なる。

見学して印象
的であったの
は、周囲にある
商業建築とつま
く共生している
ことである。民
にたいしてお上
として睥睨する

サービスはとんとん変化するの
で、それに対応しなければな
らない。またサービスを提供
するのは、公共団体の
みならず、NPOなど
も含めた、それこそ地
域社会そのものであ
る。
するとたとえば10
年ごとに更新できる
プレキシルで、費用
のかからないプレハ
ブ建築でよい。しかもそ
のプレハブ建築を、本
格的な建築と同等に
あるいはそれ以上に瀟
洒にデザインできれば
とくに文句は出ようが
ない。

公共建築の歴史的な
流れからいうと、戦後
の啓蒙主義的なモダン
・スタイルの時期が続
き、そして付加価値を
もとめたポスト・モ
ダンの時代があった。
後者には、西洋の大様式を採
用したものから、瓦屋根や
地方様式をも付加するいわゆ

さりげなく街に溶けこんで

この身体フィット志向
は、教条的な機能主義で
もなく、機械美学を追究
した60年代の建築でも
なく、記号を詰め込みす
ぎた書割りでもなく、い
ちど「建築」という制度
をカッコで括り、フラッ
トな視点でプレハブまで
視野を広げ、自分にあっ
たものを選んでゆく。そこ
にはデザインのみならず、
生産と流通における
革命もが展望されている。

建築を支えていた柱の
ひとつであった公共建築
の本質が変わりつつある
のだから、そこから二
世紀の建築の可能性その
ものが垣間見える。これ
はけっして大げさな言
方ではないのである。

*「景観を読む」は3カ月
に1度掲載します。